

シルバーウルフ

ボーイスカウト英国連盟の最高勲章。英国内だけでなく世界の国々のスカウターに授与されてきた。その第一号はボーイスカウト創設者ベーデンパウエル卿であった。

英国外では、元首クラスと、ボーイスカウト運動に著しく貢献した元首に準ずるスカウターに授与された。1920年、12個が作られ、章が設けられてから現在までおよそ300個が製造された。現在のガイドラインの下では、世界の約200万人のメンバーあたり、1個の章が作られることになっている。

シルバーウルフの大きさは狼の鼻先から末尾まで約5.5センチです。

大正10年（1921年）、昭和天皇が皇太子時代、大正天皇の名代として、英国王ジョージ5世戴冠式臨席のため英国を訪問された。その際、エジンバラ市キングスパークで開かれたボーイスカウト大会に於いてベーデンパウエル卿より献上されたのが日本の第一号である。その後日本人として始めて1924年ギルウェルコースを修了し、日本ボーイスカウト発展のため尽力された佐野常羽伯爵に昭和6年（1931年）授与された。以来、日本からの受賞者はない。

託されたシルバーウルフ

日本には2つしかシルバーウルフがない。実は3つ目のシルバーウルフが存在する。

1933年、北欧バルト海沿いにあるラトビア共和国コミッショナー（公職は農務副大臣）ベリザードラジン氏に創設者ベーデンパウエル卿より授与されたシルバーウルフである。そのウルフを預かっているのは私であり、なぜ私のもとにこのような、貴重な品があるか、少々時間を頂き述べることにする。

1968年、アメリカ留学を希望していた私は大学を卒業した月、アメリカ政府より奨学金を受けられるフルブライト大学院留学生選考試験を受けた。結果は見事な失敗であった。夢を何とか実現すべく、大学から推薦状や様々な書類を手に入れ、半年分の生活費を何とか親から工面してもらい、一人貨物船に乗り込み、田子浦港からアメリカを目指したのです。13日間の航海の後、西海岸のシアトルにたどり着き、YMCAに宿を取り、さっそく周辺の大学と入学交渉を行い、一月後、オレゴン州立大から許可を得ることが出来たのでした。飛び上がって喜んだのもつかの間、当然のことながら、「貴方の人物、学力を保証し、経済的にもサポートしてくれる保証人を必要とします。」と言われたのです。

アメリカに着いたばかりの私にそんな人はいませんでした。解決策も無く何日か悩み続けました。全くの偶然に、YMCA のロビーで会った若者から、「困っているんだったら、この人に相談したら。」と紹介されたのがMR. ラジンだったのです。

MR.ラジンは、白髪をオールバックにした中肉中背で品のよい紳士で、紺のブレザーにグレーのスラックスを身につけ度の強い眼鏡の奥の目は、優しくかった。YMCA のディレクター室で、私は最大限努力した英語を使ってこれまでの経過を話し、現在の困難な状況を説明した。私を観察しながら熱心に聞いていたMR.ラジンは、質問をした。

「学校生活の外に何か活動していたことはありますか。」

「はい。少年の頃から、ボーイスカウトでした。アメリカへ来る前までは、スカウトマスターでした。」と私は答えた。

しばらく考えてから彼は、「今晚、私の家に来たまえ。食事をしながらもう少しきみと話をしてみたい。」

夕方、私は彼のこじんまりした家を訪問した。質素だが、エジーテス婦人の心のこもった料理をワインと会話とともに楽しんだ。食事中も彼は様々な質問をした。それに対し、私は何とか必死で答えた。

食後のコーヒーカップを置くと、居間に移り、愛用のパイプに火をつけた。彼お気に入りだと言うパイプタバコ、ボンドストリートの香りが心地よく漂ってきた。

「私もずっと以前、スカウターだった。」と彼は言った。

それから彼は、ベーデンパウエル卿から直接講義を受けた1928年のギルウェルコースの事、ロンドン郊外ウインザーでのスカウト大会の事、彼の祖国バルト三国の一つラトビアでのスカウティングの事など、私には夢のような想像を越えた大きな話を、次から次と聞かせてくれた。

夜遅く、私は彼の家を辞した。別れ際に、

「君の保証人は、必ず見つけてあげる。安心しなさい。」と言った。

彼はアメリカ市民権を、持っていない。だから他の人を見つけると言ったのである。いつまでも誇り高きラトビア市民であり、ラトビアのスカウターであり続けたいのである。この後、私が無事、立派な保証人を得られた事は言うまでもない。

オレゴン大学で秋の学期を何とか終えて、一息ついたとき、クリスマス休暇に、**MR.**ラジン宅に招待された。雪のシアトルは、クリスマスデコレーションの豆電球に飾られた家々と調和して、おとぎの国のように美しかった。

その晩も私は **MR.**ラジン、エジーテス婦人と共に、ディナーを楽しんだ。食後、暖炉のある居間に移り、燃え盛る炎を見ながら楽しい時を過ごした。私の英語も夏と比べ、大分上達していた。**MR.**ラジンはゆり椅子に掛け、私はファイアーキーパーとして、暖炉の前のカーペットに座っていた。

彼は愛用のパイプをふかしながら、様々な話をした。音楽、絵画、文学、歴史、地理、宗教、哲学等々、いずれも彼の教養の豊かさを強く感じる内容であった。話がスカウティングの事になり、しばらくしてから書斎にたって行った。居間に戻って来ると二つの品を私に見せた。

一つは、英国ギルウェルコースの修了証。創設者ベーデンパウエル卿のサインのものだ。そしてもう一つは、銀色の小さな狼の型をした勲章。スカウターとして最も名誉ある勲章、シルバーウルフ。

私は一瞬、戸惑って彼の顔を見上げた。彼は再びゆり椅子に腰掛けると静かに語りだした。

「ヤス。私が滅んでしまった祖国、ラトビアから逃れるとき、持ち出せたのはこの二つと、数枚の絵画だけだった。私はスカウティングは、人間として生きていくのにこの上なく価値のあるものと信じているんだよ。」

そして、物静かに、1940年のソビエト軍によるラトビア侵攻に対し、ラトビアの人達がいかに戦ったか、壮烈な最期をとげたボーイスカウト総長の話、コミッショナーだった彼の抵抗運動など、など。

「祖国は滅んでしまった。しかし、いつか必ずラトビアはよみがえる。」

そう言った **MR.**ラジンの目に光るものを見た。

その後も私はアメリカの家、**MR.**ラジン宅を、時おり訪ね、様々な事を学んだり、日本の文化や、武士道などについて語り合う機会を持つ事ができた。

2年間のアメリカ留学を終え、私は日本に帰った。**MR.**ラジンは香港大学に請われ、教壇に立ち、その帰国途上日本に立ち寄り、私の案内で、京都、奈良、富士山、東京などを見て日本を楽しまれた。彼がアメリカに戻って、数年後、彼の訃報を聞いた。

翌年、何とか予定を組み、シアトルにエジーテス婦人を訪ね、お悔やみを申し上げる事が出来た。

婦人は「**MR.**ラジンの思い出になる品をぜひお持ちなさい。そうだわ、彼が

あなたに時々見せていた、銀の狼がいいわ。」とって私の手にシルバーウルフを握らせた。

以上が私がシルバーウルフを預かるに至った物語である。それから数十年間、シルバーウルフは、机の引出しの定位置に住むことになった。時々、銀の狼を磨きながら、MR.ラジンの事を思い起こし、青春をおくったアメリカ生活を回想したりした。

その都度、この銀の狼をどうしたらよいものかと悩んだ。

1989年、ベルリンの壁崩壊を楓に、東欧の共産主義国が次々と民主化し、ソ連も解体した。バルト三国も独立した。勿論、ラトビア共和国も再度独立し、よみがえったのである。そして、ついにボーイスカウトラトビア連盟も、約1000人のスカウト達をもって設立された。

シルバーウルフは祖国に帰るべきだ。1933年のラトビアからMR.ラジンと共に英国、アメリカと移動し、1970年代私と日本にやって来た。70年以上にわたり、世界を巡ってきたウルフも、きっと祖国に帰りたいにちがいない。祖国、ラトビアではボーイスカウト達が待っているはずだ。

MR.ラジンが言った事が真実となった。

〔ラトビアは必ずよみがえる。〕

MR. ラジンの日本観

MR.ラジンが日本について語った事が思い出される。

私が少年時代、まだラトビアが独立間もない頃、父が話してくれた。ロシアの東のはて、さらに海を隔てたところに、日本という小さな国がある。その国の人々は、決して豊かではないが、大変勤勉で、何よりも名誉を重んじていた。

1904年のこと、何世紀にもわたって、ラトビアを強権で統治してきたロシア帝国が、日本と戦った。ロシアは、日本制圧のため、ラトビアに近い、バルチック海の軍港から100隻以上の世界一の大艦隊を派遣した。ところが日本の人々は、全力で戦いこの大艦隊をすべて撃沈してしまった。

ラトビアの人々は自国の事のように歓喜し、会った事もない日本人を尊敬した。その時から、私はずっと日本に興味を抱き、日本についての本も沢山読んだ。ラ

フカディオハーンなどは、好きな作者の一人だね。日本人と話をしたかった。日本にも行ってみたい。その国の自然や、風土に接すると、人々のことがわかるからね。

2006年2月

川島泰彦記